

導かれてきた道程

Sr. 荒 井 聰 子

夢を持ち、夢を追うことが若い世代には薦められる世の中だが、この観点から自分の歩みを振り返ってみると、およそ風上におけない「なりゆき」の旅だったような気がする。研究についても、意思決定ということの苦手な私の前に、いつの間にか「これしかない」という形で拓かれて来る道を、手探りしながらおぼつかない足取りでたどっているうちに今日になってしまった、というのが、偽らざるところである。しかし、そんな歩みにも曲がり角の度に「導きの手」があったことを今改めて感じさせられる。大学に身をおきながら、こうした指導者の恩にお報いできるような仕事の一つも成し遂げ得ずに年を重ねたことが申し訳なく、感謝と自責の入り混じった思いを深くしている。

1

私の入学した当時の奈良女子大学文学部は入学定員80名、3年次で正式に専攻別になるシステムであった。しかし、入学後間もなく、同級生が「私ね、××さんと一緒に、毎週ペンギン一冊読むことにしているのよ」と事も無げに言っただけなのには度肝を抜かれて、英文学専攻は絶望だと思った。私はといえば、毎週の授業の予習で精一杯だったから。それでも、「来るものは拒まず」という主任教授の方針のお陰で英語英米文学科という名前の学科に籍を得て、古寺の鐘を聞きながら洋書を読みかじることになった。当時奈良女子大学助教授でいらした安田章一郎先生のT. S. エリオットの講義には、わからないままに惹かれて、文字通り万障繰り合わせて出席した。窮鼠猫を噛むというが、劣等感の塊だった私は、卒業論文のテーマ選定に迷った末、安田先生のご自宅をアポイントメントもなしにお訪ねする、というとんでもない行動に出た。先生はよほど驚かれたと思うが、無作法な学生を門前払いされることもな

く話を聞かれて、「ホプキンは今取り付いても難しいばかりで得るところは少ないでしょうが、エリオットならば稚拙ななりにも（稚拙という言葉をお使いになったかどうか覚えていないが）得るところがありますから」とエリオットを薦めてくださった。今も思い出す度に冷や汗をかきながら感謝している。それでも英詩をきちんと読める自信もない人間が、詩作品は参考書片手に自己流に読み流しながらエリオットの詩論や文化論を読む訳だから、そもそもの初めから横車である。それでも彼の透徹した知性の輝きのようなものに引きずられるようにして、やみくもに読み進み、やみくもに理屈を言って‘A Study of ~’というような題をつけ、提出してしまった。この「卒業論文」は学科研究室保管となって、手元に戻って来なかったのも、正確なタイトルも覚えていない。しかし、小さな小さな限界の中で触れたこの詩人批評家は私の精神形成に強烈な影響をあたえた。特に「伝統と個人の才能」の中の、

.... But very few know when there is an expression of *significant* emotion, emotion which has its life in the poem and not in the history of the poet. The emotion of art is impersonal. And the poet cannot reach this impersonality without surrendering himself wholly to the work to be done. And he is not likely to know what is to be done unless he lives in what is not merely the present, but the present moment of the past, unless he is conscious, not of what is dead, but of what is already living.

といった「時」に対する考え方、自己表現などという自意識をいっさい滅却したところにある有意の芸術性という概念は、何か憧れのように私の奥に根付いてしまった。また、このように、個性を主張しないところに真の個性が輝き出るという事象がおこり得るのは、人々が価値体系を共有している社会においてなのだという彼の文化論の考え方にも納得した。同系統とも言えるが、「四つの四重奏」の有名な一節、

Words move, music moves
Only in time; but that which is only living
Can only die. Words, after speech, reach
Into the silence. Only by the form, the pattern,
Can words or music reach
The stillness, as a Chinese jar still
Moves perpetually in its stillness.

の有形と無形、動と静の結合、特に最後の二行に使われた比喻は、後に博物館で中国の青磁や白磁の壺をたびたび見るようになる頃には一種の先入観になってしまっていた。心が騒ぐ時にはこの壺のある陳列室へ出かけて、聴き入るような気持ちで柔らかな形と輝きを眺めた。なぜか silence ではなく stillness に心を惹かれた。考えて見れば安田先生のおっしゃった通りになっていったようである。先生は間もなく名古屋大学に移られ、日本英文学界の重鎮として多くの学者たちを育てられた。

2

大学を終えて、長崎純心聖母会の修道女となり、昭和39年4月に専任教諭として赴任したのは新設の東京純心女子高等学校であった。シスター江角の直接のご指導を頂きながら、第一回入学生とともに教員一年生も出発した。6年ほど勤務した後、上智大学の修士課程にとのご指示があり、受験はしたものの、科目によって成績が不揃いな問題受験生であつたらしい。私が出身大学でやってきた「英語学」は少々亜流であつたらしく、渡辺昇一先生からは正統の英語学を勉強しなさいと分厚い本を貸していただいた。面接の最後に米文学の刈田元司先生から、「とにかく純心聖母会は、あなたに勉強させたいんでしょうからね。」と釘をさされて、入学前にすっかり萎縮してしまった。同級には、いかにも秀才らしい雰囲気 of 福田逸氏もいて、時々「父〔恒存氏〕が言うには…」とか、毛並みの良さを垣間見せておられた。こうしたスマートな

現役ソフィアン達の中で、一昔前の地方国立育ちの不器用者は最後まで小さくなっていたらしく、外国人の教授神父から大笑いされる始末であった。このドイツ人神父、ヨゼフ・ロゲンドルフ教授は、第二次大戦中も同盟国人として日本に留まり、上智大学を守り抜いたイエズス会士のお一人である。ロンドン大学に留学し、日本学の論文で博士号を取得されたと伺っている。大学院の授業ではヨーロッパ的視野から見た英文学(小説)のセミナーを持っておられたが、毎年必ずアーサー・ケストラーの「真昼の暗黒」を扱われるのが特長であった。この作品は一度ならずノーベル賞候補になり、世論への影響も大きかったものではあるが、その作者であるハンガリー生まれの帰化英国人作家ケストラーをコンラッドなどと並べて、イギリス文学のコースで取り扱うところはあまり無かったと思う。スターリンの肅清裁判を分析したこのルポルタージュ小説は、個人の価値を中心として多くの根本的な問題を提起しており、白黒の対照をはっきりさせながら書くジャーナリスト的手法とともに、ヨーロッパという政治的坩堝に触れたこともない日本人学生には深刻な斬新さともいえるべきものを持っていた。しかし、だからといって特に自分の研究課題にしたいと思った訳ではなかった。

修士論文の研究対象作家としては、エリオット、コンラッド、シェクスピア、この順番で私の夢の中にあった。しかしどれも超大物作家であり、一次資料も多いが研究書の方はお蔵を建てるくらいありそうだった。時間的にきびしい条件のもとにある人間が手をだせるものではなかった。それでは、と開き直って現実から出発。私自身にとって興味のある問題を提起していて、英文学の世界ではそれほど人口に膾炙しておらず、研究者も研究書もまだあまり多くないであろう作家、ということで、前述のケストラーに思い至った。随分失礼な選択理由ではある。しかも、この作家を扱うには、コミンテルンを中心とする国際共産主義運動とロシア革命後のソヴィエト連邦、スターリニズムなどの歴史的社会的背景をさけて通るわけに行かない。当方はアンチ・コミニズムの砦のように言われているローマン・カトリックのシスターだというのに。

ロゲンドルフ先生はこの選択を大変喜ばれたようであった。「でも、シスターが共産主義運動のことをやるのは…」と言いかけると、眼鏡の奥の目をき

らりと光らせて、「あなたが人間として興味のあるものを、シスターだからやらないということは、あり得ません。」とびしりと言われた。これが、以後、私の研究生活を支える第二のキーワードになった。このお陰で、ずっと後になって再びこの課題をとりあげることになった時にも、心安らかに自分の道を進むことができた。後で分かったところでは、ロゲンドルフ先生はオーストリアでの大学時代にアーサー・ケストラーと同級生で、生涯の友人でもあられたのだった。また、戦時中、言論の自由を守る立場から、上智大学の中にあったカトリック誌の編集室に特高警察に追われている左翼作家を匿われたこともあったという。そんなことから、日本の1930年代問題と左翼運動の事情にも通じておられ、鶴見俊介を中心とする共同研究「転向」を推奨されて、ケストラーをやるなら日本の転向作家のケースとの比較を入れるように、との示唆をいただいた。近道をするつもりが、かえって大変なことになってしまった。

ケストラーの一次資料は絶版の一冊を除き、揃えることができたが、研究書の方は流石に少なく、他の作家との比較研究を入れても数冊程度であった。日本の場合との比較ということもあり、人跡未踏の分野になってしまったので、好きなことが言えるというか、言うしかない状況であった。私の視野は、こんなことでも無ければ振り向くことさえも無かったであろう方向に向かって広がることになった。シオニズム、コミユニズム、ファシズム、コミンテルン、スペイン戦争、東大新人会、作家同盟、蔵原惟人、社会主義リアリズム、等等を背景として作家と文学作品を考えることは、文化を考え、人間を考えることでもあった。ここで詳細に立ち入ることは避けたいが、モスクワから吹き寄せて来る革命運動の風の中にある作家像を見るとき、あくまでも個を貫く西欧型と、集団への忠誠に賭ける日本型の対照は明白であった。日本人作家でケストラーとの対比という光の中に自然と浮きあがって来たのは、中野重治であった。比較が入ることで、面白さが加わったが複雑さも倍以上になり、遅筆はますます極端になって論文執筆は捗らず、期限内といっても秒読み段階に入っただけの修士論文提出となった。指導教官をはじめ多くの方々にご負担もかけ、助けて頂いてのことである。どうにか口述試験も終わり、博士課程へのお薦めはありがた

くお断りして、私は修道女としての終身誓願準備のため、長崎に移った。

3

一応、修士ということになったので長崎では短期大学に所属し、シスター江角ヤス理事長のもと、シスター山田雅子学長、片岡弥吉副学長のお世話になった。1年間を経て満9年の有期誓願期を満了し、生涯をお捧げする誓いを立てることを許されて終身誓願者としての指輪もいただいた。外見上はやっと一人前のシスターになった訳だが、これで未熟者が突然円熟の域に達するというわけにはいかない。英語の話せない英語の教師であることにも変わりはない。

そんなある日、シスター江角から、1年間休職させるからイギリスで英語を勉強してくるように、とのご指示があったが、勉学先も宿泊先も当てがあるわけではなかった。大慌てで、唯一手近にあったパンフレットを頼りに入学随時の英語学校に手続きをした。ロンドンの真中であって、建物は古かったが、内容的には良いところであったのは幸運だった。5月から3月までと言うタイムリミットの中で、ケンブリッジ英検受験準備の傍ら日帰りで行ける範囲の観光旅行に精を出し、将来授業に使えるような資料をあつめた。

この間に修道会側の方針が新しくなり、可能ならば大学に籍をおいて纏まった勉強を、ということになった。イギリスの大学といえば、オクスフォード、ケンブリッジ、ロンドンと三つの名前しか知らなかった私は、また大慌てとなった。その頃の日本では学士号や修士号を二つ取得することはまだ一般化していなかったから、無難なのは博士課程をねらうことであつたが、準備も予備知識も無いわけだから、雲をつかむような話ではあつた。研究課題といっても、修士論文のテーマ関連で行くしか仕方がない。困り果てた末に、英語学校の担任でオクスフォード出身のミスター ドナルド・コリスに相談を持ちかけた。この先生の実際的アドバイスと、上智大学からの推薦状を書いてくださったロゲンドルフ先生、マシー先生のお蔭で最終的にはオクスフォード大学から受け入れ通知が来て、気が遠くなりそうに驚いた。

英国の大学院では、期限内に出願したものを順次審査して行く方式らしかつ

たが、オクスブリッジの場合は、カレッジと学部学科の双方が受け入れなければ入学はできない。ケンブリッジの方はカレッジまでは通ったが、英文学科が不許可であった。ただ、不合格通知といっても、適当な指導教官がいなかったという理由を述べた上で、こういう研究ならばロンドン大学に出願されてはいかがですか、というアドバイスつきである。ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジには当時1930年代を代表する詩人の一人スティーヴン・スペンダーが教授としておられた筈である。こちらに出願はしたが、結果が出る前にオクスフォードが決まったので取り下げた。しかし、出願者一人一人を研究者として大切にするケンブリッジの「不合格通知」には感激してしまった。一方オクスフォードはといえば、一切音沙汰なしで、こちらがすっかり諦めた頃にいきなり合格通知であった。私としてはイギリスに来てまで日本の左翼文学とお付き合いするつもりは無かったけれども、推薦状の中で比較研究を強調しておいた、というお便りを頂いて、それに合わせるために自分のエッセイでも少し触れておいた。その珍しさが功を奏したのかも知れないが、英文学科には日本語の読める指導者が居ないから、英文学の指導教官をつけ専攻学生としての便宜はあたえるが、学籍は日本文学の指導教官のいる東洋学科の方に置く、という念入りな処置であった。二人も指導教官がつくと言う贅沢なことであったが、これで日本との比較研究からは逃れられないことになった。

日本文学の指導教官は、ドクター ブライアン・パウエル（セント・アントニーズ カレッジ、後にキーブル カレッジ）英文学がドクター ヴァレンタイン・カニングム（コープス・クリスティ カレッジ）、それに私自身の所属するセント・アンズ カレッジからはモラル・チューター（学生生活にかかわる担任）としてミス マーガレット・ハバードという東洋学者がついて下さり、その上に上級生が一人、ガーディアン・エンジェル（守護の天使）として世話をしてくれる。私の場合、ケイト・パターソンというケンブリッジ出身の美しい院生だった。これだけ手厚く面倒を見てもらっても、何の予備知識もなしに迷い込んだ日本人には、知らないこと戸惑うことが多く、迷惑をかけたり恥をかいたりすることもあったが、その度に誰かがそっと助けてくださった。自宅

がわりにお世話になったナミュール・ノートルダム会（日本では岡山の清心女子大学経営）の修道院でも同じであった。

しかし、この大学の、他大学出身者への学問的ガードの堅さもまた相当なもので、オックスブリッジ以外の大学出身者の博士課程入学当初の身分は、「博士課程につながる修士候補学生」Probationer M.Lit. Leading to Doctorate というもので、修士課程にさえ正式には受け入れておらず、最初の一年間は大学側がいつ何時でも、研究の具合によって退学勧告を出す権利を保有している。1年の後審査をへて候補の字が落ちて修士学生となり、さらに1年たったの審査で博士論文になる研究内容と認められれば、やっと博士課程在籍と言えるようになる。実例を調べたことはないが、この時点で修士止まりという審査結果が出ることも理論的には可能である。博士課程に願書を出して、修士課程合格という結果が出た例は確かにあった。身分的には面倒でも、最少3年の在籍で論文提出はできるから、時間的にロスがあるわけではない。ストレートに口述試験に合格すれば、最短3年でD.Phil. (= Ph.D.) になるが、補足／修正要求がついて論文が差し戻されると、同学年中には再提出できないから在学年数が延びることになる。文系にはこの例が多いと聞いていたが、私も1年間の帰国短大勤務を含み最大在籍年数をかけた上に、ご多聞にもれず後者であった。しかし、テーマの複雑さから、論文の語数制限を5万語から6万語にする特別許可も同時に出た。この最終段階で不合格という例も当然あるわけで、最後まで気が抜けないことはどこの大学でも同じであろう。このプレッシャーさえなければ、オクスフォードという街での研究生活は学生にとって天国なのだが。

しかし、私が勝手に「後ろからの指導」と名付けている指導方法、指導体制を経験したことは個人的に大きな収穫であった。まず、大学全体に「指導教官は自分の弟子をつくってはならない」という大原則があり、もし、この傾向が見えたら学生は訴え出るように、と言う窓口機関があって、直ちに指導教官変更となるらしい。学位審査その他アカデミックな事柄での教員、学生の不公正や不正行為を裁く学内裁判所のシステムもある。そして、個人への指導であるが、先生とは教えてくれるものと心得ている「甘え」の国の人間にしてみれば、

大分調子が違っていた。学部生ではないので、定期的なチュートリアルはなく、必要に応じての面接指導であるが、これはどうなのでしょう、とか、どう思われますか、とか、答えを求める問いを発しようものなら、敏感に反応して「その質問には答えられません。」と平手打ちが返ってくる。その代わり、こういう点について調べたいのですが、とか、こんな資料を探しています、とか、この辺がまだ不明確で、とか、自分主導で問題点を報告すると、頭の中に収まっているらしい専門図書館からさっと関係図書目録が出て来たり、専門家訪問の機会を作ってくださったり、自分でアプローチする仕方を指示されたりする。決して先に立って歩いたり手を貸したりはしないが、学生が自分で道を見つけ、歩いて行くのに必要な手助けは何時でもする用意がある、という態度が二人の指導教官に共通して守られていた。本筋を外さないように後ろからしっかり見守られているので、思う存分自分を出して見てよいのだ、という安心感はかけがえのないものだった。また、英国内では、この大学の名前を使うと「開けゴマ」の呪文のように、閉ざされた様々なドアがするすると開くのも驚きであった。

それにしても、成り行きとはいえ、もともと英文学に興味があったのに、無尽蔵にあるイギリス関係の資料に囲まれながら、ユダヤ系ハンガリー人の帰化人作家アーサー・ケストラーと、日本人中野重治の比較対照研究というのでは、あまりにフラストレーションが大きすぎた。こうと知っていたら、ボドレイアン ライブラリーの中でも華やかな、デューク・ハンフリーズ ライブラリーに並んでいる古い大型本を積み上げて読みふけるような格好良い研究でもしておくのだった、と自嘲して見ても遅いので、20世紀のペーパーバックなどを持ち込んで、せめて15～16世紀の図書室に座りに出かけて行ったりした。ともかく、イギリスにいるのだからイギリス人をやらない手はない、と、同時代人でケストラーの友人でもあったジョージ・オーウェルを加えて、英、欧、日、の三角型で比較対照を行うことにした。指導教官は大変喜んでくださったが、また一段と大変なところへ自分を追い込んでしまった。モスクワからの赤化の風に、三人の作家がそれぞれの文化圏でどう反応し、どのような困難や失望を味わい、それをどのように文学作品に反映させたのか。こういうテーマに

イギリス人は誰も驚かなかったが、シスターは当然キリスト教文学をするものと期待されている日本人の方々には、不可解、不可能なテーマと見られることもあった。私自身もそれに同調して、否定的な気分になり落ち込むこともあったが、修道会の終始変わらぬサポートをいただき、大学からノーと言われたい限り前に進むしかないのだと思い定めて、ロゲンドルフ先生の言葉を頼りに遅々とした歩みを最後まで続けることになった。対象作家を三人にしたために、それぞれが二つの異文化に挟まれた比較の形になり、各自の文化的個人的独自性がくっきりと浮き上がることになったこと、また、概念的に否定するのではなく、左翼運動を内部から見ることで、そこに関わっている多くの個人を尊敬と愛惜の念を持って見るできるようになったことは、修道女としてありがたいことだったと思う。また、神を否定しながらも西欧の作家たちが、価値観や存在感の根底にぽっかりあいてしまった空洞に否応なしに行き着き、これを満たす超越的普遍的な何かを求めて模索している姿からも強烈な印象をうけた。ケストラーのいわゆる ‘Age of Longing’ (渴望の時代) である。

日本に帰ってから5年間は何も発表せずに基礎勉強をしよう、それから、今度は彼らと同時代にカトリックへと回帰したイギリス人作家たちに目を向けたい、と願っていたが、ケストラーやオーウェルについて時々話したり書いたりした他は、基礎勉強にもまともに手がつかないまま時に流されて来てしまった。カトリック作家としてイーヴリン・ウォーを少し覗いて見たけれども、まだまだ当分お付き合いを願わなければ、student の名にも値しそうにない。その先にはグレアム・グリーンその他多くの小説家、評論家が控えている。何時のことだったか、当時国際人間学部長でいらした大塚定徳先生が、ある教員の研究業績について私が弁解したのを抑えて、「忙しくてもするのが研究です。」ときっぱり言われたことがある。実践者の言葉の重みに頭が上がりず、これが私の大学教員としての良心に摺込まれたもう一つのキーワードとなった。与えられた多くのものに応えて、何時の日か私も小さな研究でも神様にお捧げできる日がくるだろうか。それはまったくわからないけれども、心身の状況の許すかぎり、感謝の心をもって学びつづけたいと願っている。

了

荒井聰子 略歴

1937年11月4日 横浜市にて出生

(学歴)

1953年 3 月 鹿児島純心女子高等学校卒業

1961年 3 月 奈良女子大学文学部 英語英米文学科卒業

1972年 3 月 上智大学大学院 文学研究科 修士課程修了
文学修士（上智大学）

1983年 7 月 英国 オクスフォード大学大学院 東洋学研究科 博士課程終了
学術博士（オクスフォード大学）

(職歴)

1964年 4 月 東京純心女子高等学校教諭

1972年 4 月 純心女子短期大学助手（社会科）

1973年 4 月 純心女子短期大学講師（社会科）

1979年 4 月 鹿児島純心女子短期大学助教授（英語科）

1983年11月 鹿児島純心女子短期大学教授（英語科）

1994年 4 月 鹿児島純心女子大学助教授（国際言語文化学部）

1995年 5 月～2000年 3 月 鹿児島純心女子大学学長

1998年 4 月 鹿児島純心女子大学教授（国際言語文化学部）

2001年 4 月 鹿児島純心女子大学教授（国際人間学部）

2001年 4 月 鹿児島純心女子大学キリスト教文化研究センター所長

2008年 3 月 鹿児島純心女子大学退職

研究業績一覧

[著書]

- 2003年 7 月 「風土と人間」 新薩摩学シリーズ 2 (共著) 南方新社
〈文学の視座としての境界
—ジョージ・オーウェルとイギリスの階級社会—〉を執筆分担

[訳書]

- 2002年 6 月 「鮫島尚信 在欧外交書簡録」 (共訳) 思文閣出版
(英文書簡の一部を翻訳分担)

[研究論文]

- 1972年 1 月 The Problem of Ideological Conversion in Literature:
The Case of Arthur Koestler 上智大学提出
修士論文
- 1983年 3 月 A Study of Political Commitment in the Works of George Orwell,
Arthur Koestler and Nakano Shigeharu 英国オクスフォード大学提出
博士論文
- 1991年 3 月 Authors in Embryo: Early Formative Period of George
Orwell, Arthur Koestler and Nakano Shigeharu 鹿児島純心女子短期大学
「研究紀要」第21号
- 1992年 3 月 Writers and Political Commitment 鹿児島純心女子短期大学
「研究紀要」第22号
- 1992年 3 月 Commitment and Writing 鹿児島純心女子短期大学
「研究紀要」第22号

- | | | |
|-----------|--|---------------------------------------|
| 1993年 3 月 | The Literature of Commitment | 鹿児島純心女子短期大学
「研究紀要」第23号 |
| 1993年 3 月 | George Orwell, Arthur Koestler
and Nakano Shigeharu at a
Turning Point of Their Political Commitment | 鹿児島純心女子短期大学
「研究紀要」第23号 |
| 1994年 3 月 | Literature of Longing: Three
Case Studies | 鹿児島純心女子短期大学
「研究紀要」第24号 |
| 1994年 3 月 | Literature of Political
Commitment in the 1930th
And the 1940th | 鹿児島純心女子短期大学
「研究紀要」第24号 |
| 1995年 1 月 | Stranger の文学—Arthur
Koestlerの政治小説 | 鹿児島純心女子大学国際言語文化学部
「国際言語文化研究」第 1 号 |
| 1996年 2 月 | George OrwellのNineteen
Eighty-Fourにおける
虚と実の問題 | 鹿児島純心女子大学国際言語文化学部
「国際文化研究」第 2 号 |
| 1998年 2 月 | 第二次世界大戦と作家たち
—ジョージ・オーウェルと
林房雄—
1. 形成期 | 鹿児島純心女子大学日英研究センター
「研究年報」第 1 号 |
| 2003年 1 月 | 第二次世界大戦と作家たち
—ジョージ・オーウェルと
林房雄—
2. 作家として (オーウェル) | 鹿児島純心女子大学国際言語文化学部
「国際言語文化研究」 第 9 号 |

- | | | |
|-----------|---|--|
| 2004年 1 月 | 第二次世界大戦と作家たち
—ジョージ・オーウェルと
林房雄—
2. 作家として (林 房雄) | 鹿児島純心女子大学国際言語文化学部
「国際言語文化研究」 第10号 |
| 2005年 1 月 | イーヴリン・ウォーと
カトリック信仰 | 鹿児島純心女子大学
キリスト教文化研究センター
「キリスト教文化研究センター報告」第1号 |
| 2008年 3 月 | An Observation of Religious
Framework in <i>Brideshead</i>
<i>Revisited</i> by Evelyn Waugh | 鹿児島純心女子大学国際人間学部
「国際人間学部紀要」第14号 |